

近現代日本 人物史料情報辞典 3

伊藤 隆・季武嘉也 [編]

吉川弘文館

国会議録検索システム」(<http://teikokuai.kokai.go.jp/>)から、参議院議員時代の下村の発言は「国会議録検索システム」(<http://kokkai.ndl.go.jp/>)から閲覧およびダウンロードが可能である。

伝記には、北島驥子雄編『聖将の面影』(第二十期生会、昭和四十四年)があるが、同書は下村と接触のあった人々による回想が中心の小冊子で頁数も少なく、本格的な伝記の刊行が待たれる。また下村が昭和十七年から昭和十八年にかけて書いた「征戦閑話」という伝記的性格の史料もあり、『聖将の面影』と共に「下村定関係文書」に入っている。

下村が陸軍科学学校長在任中に同校の教官に対して行った戦術教育ならびに職員および生徒に対して行った訓示・訓話の主要なものをもとめた、陸軍科学学校編刊『砥礪之訓』(昭和十七年)というA5判、二〇二頁程度の書籍が存在する。同書は、下村が校長在任時に在籍した職員および学生に配布が限定されたため、古書店でも見ることは稀である。なお、『聖将の面影』、『砥礪之訓』ともに「下村定関係文書」に含まれている。

戦前に下村が執筆したものとしては、「一九一四年九月ニ於ケル「マルヌ」河畔ノ会戦ニ就テ」(『偕行社記事』五一〇号、大正六年)がある。

戦後、下村は『偕行』への寄稿を中心に多

数の著作を執筆したが、大別すると陸軍時代の回想と戦後日本の防衛政策に関するものに分類することができる。陸軍時代に関する論著としては、『偕行』に寄稿したものとして、『単独上奏の思い出』(昭和二十七年七月)、『終戦処理の回顧』全三回(昭和三十三年九月十一日)、『終戦の思い出』(昭和三十三年九月八日)、『終戦処理の思い出』全三回(昭和三十三年八月十日)があり、それ以外の雑誌に投稿したものとしては、『帝國陸軍の骨を拾ふ』最後の陸軍大臣の記録(『文藝春秋』三十一、九、昭和二十七年)、『単独上奏の思い出』(大陸問題)一七、昭和二十七年)、『世界史にな

い復員』(『政経指針』二一八、昭和三十年)等がある。戦後日本の防衛政策に関するものとしては、『新自衛軍建設に関する一構想』全二回(『偕行』昭和二十九年六月七月)、『難産の国防会議―法案審議の経過及私見―』(同昭和三十年八月)、『わが国防の現況に対する雑感』全三回(同昭和三十四年四月六月)、『防衛庁の省々昇格』(同昭和三十三年五月)がある。また、戦後に執筆された戦史に関する論著としては、『三月十日に因んで』(同昭和四十年三月)、『一部に誤伝された北村旅団』(同昭和四十一年三月)、『畑将軍と杭州湾上陸作戦』(同昭和三十七年六月)があり、人物評論としては『吉本大将を偲ぶ』(『偕行』昭和三十四年十月)がある。なお、本項で記載しきれな

かった下村の『偕行』投稿記事については、『偕行』記事索引(『偕行』三二一、臨時増刊偕行社創立百周年記念年号、昭和五十二年)を参考にすると良い。

評伝としては最もよくまとまったものは、保阪正康「下村定―陸軍解体の見届け役をつとめた陸相―」(同『陸軍良識派の研究』光人社、平成八年)や、上述した下村の日記や陸軍関係の史料を使用した保阪正康「最後の陸軍大臣、その残された手記」(同『昭和陸軍の研究』下、朝日新聞社、平成十一年)である。この他にも、松村秀逸「下村定という人」(『偕行』昭和三十四年五月)や、死去した直後の『偕行』には「下村定氏の偕行社葬」、横田豊一郎「故下村将軍を仰慕する」、広瀬栄一「亡くなられた日の下村大将」、菰田康一「下村将軍を偲ぶ」、土井勤「下村閣下の思い出」が掲載されているとともに下村の遺稿となった「近ごろ、はがゆく思うこと」(以上昭和四十二年五月)が収録されている。

栗屋憲太郎・吉田裕編・解説『国際検察局(IPS)尋問調書』(日本図書センター、平成五年)に、国際検察局が行った下村の尋問調書およびその関係資料が収録されている。(長南 政義)

下山定則(しもやま・さだのり)
明治三十四―昭和二十四年(一九〇一―一九五九)